

2021 年度春季人権週間プログラム講演会

日時：2021年7月5日（月） 17:30～19:00

YouTube Live

『マイクロアグレッション —日常生活に埋め込まれた無自覚の差別—』

講師 金 友子 氏（立命館大学 国際関係学部 国際関係学科 准教授）

○司会：ただいまより、立教大学人権・ハラスメント対策センター主催、春季人権週間プログラム公開講演会「マイクロアグレッション—日常生活に埋め込まれた無自覚の差別—」を始めます。本日はたくさんの皆様にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

立教大学人権・ハラスメント対策センターでは、例年、春と秋に人権週間プログラムとして、人権啓発の講演会や映画上映などを行っています。2019年度までは対面で実施して参りましたが、2020年度からオンラインで講演会を開催し、全国から多くの方にご参加いただけるようになりました。今回の講演会にも学内外から300名以上のお申し込みをいただいております。

今回のプログラムは、最近注目が集まっている、「マイクロアグレッション」がテーマです。「マイクロアグレッション」は、小さな侵略、小さな攻撃という意味で、わかりやすい差別ではなく、日常生活の中に当たり前のようにある小さな差別のことを言います。2010年、アメリカでコロンビア大学のデラルド・ウィン・スー教授が「マイクロアグレッション」の概念を体系的に解き明かした“Microaggressions in Everyday Life”という本を刊行しました。

昨年、この本の日本語版『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』が日本で刊行されましたが、この翻訳を行ったのが、社会的差別に関心を持つマイクロアグレッション研究会の方々でした。

本日はそのメンバーの一人で、第7章から第9章の翻訳を担当された金友子（きむ・うぢゃ）先生をお招きいたしました。金先生は、立命館大学国際関係学部国際関係学科の准教授でいらっしゃいます。研究課題は、離散朝鮮人の「祖国」意識。在日朝鮮人をはじめとして、朝鮮半島から世界各地に離散した朝鮮民族のエスニック／ナショナルアイデンティティと彼ら・彼女らの歴史に関するものです。研究業績として、「在日コリアン女性の生きにくさとヘイト・スピーチ—アプロ第二回在日コリアン女性実態調査の結果から」、 「マイクロアグレッション概念の射程」、 「路上の憎悪と日常の「微細な攻撃」」などの論文を執筆されています。

本日の講演では、『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』の概要をご紹介いただき、また、日本の中にあるマイクロアグレッションについて研究会で議論されたことや先生ご自身の考えをお話しいただきたいと思っております。それでは金先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【今日の流れ】

○金：皆さんこんばんは。ただいまご紹介にあずかりました、金友子と申します。立命館大学国際関係学部の教員です。本日はこのような機会をくださりありがとうございます。既に紹介していただきましたが、私は在日朝鮮人の思想と運動に関心を持っており、1960年代の韓国にコミットした在日朝鮮人ないし在日韓国人の学生運動についての調査と、マイノリティである女性が「女性である」と「マイノリティである」ことで経験する差

別や排除の問題などの実態調査を行っています。

今日はマイクロアグレッションがテーマということで、私のこれまでの問題意識と、研究者としてというよりは一般の人として、日本で暮らしてきた中で経験したことなども織り交ぜながらお話をしていきたいと思えます。

今日お話しさせていただくことの大部分は、私が翻訳に携わったデラルド・ウィン・スー氏が書いた“Microaggressions in Everyday Life”という本の中身をかいつまんでお話



します。この本を訳したチームの中には学者だけではなく、会社勤めの人や福祉施設の職員など、いろいろな立場の人が関わって翻訳ができました。学術用語なども残しつつ、わかりやすく訳を作っていますので、若干分厚いですがもし関心がありましたらぜひ手に取って読んでいただけたらと思います。

この原著は 2010 年に出版され（写真中央）、その後 2020 年 4 月に第二版（写真右）として、若干内容を変えて出版されています。今日は第一版の日本語訳（写真左）に基づいてお話しします。原著は人種とジェンダーと性的指向の三つの形態のマイクロアグレッションに焦点を当てていますが、今日は主に人種そしてジェンダーのマイクロアグレッションを扱っていききたいと思います。

今日の流れですが、まず講演の目的と、なぜいまマイクロアグレッションなのかという背景についてお話しします。二つ目に、マイクロアグレッションとは何かということをも具体的な例とともに見ていきます。そして三つ目に、マイクロアグレッションがどのような被害をもたらすのか、マイクロアグレッションが起こったときの解釈の仕方についてお話

しします。そして最後に、私たちはマイクロアグレッションをどのように防止できるのか、そして起こってしまったときにどう対処したらよいのかについてお話をさせていただきます。ただ、この防止や対処の方法については考え中です。

今日の流れ

- 1. はじめに(講演の目的、なぜマイクロアグレッションか?)
- 2. マイクロアグレッションとは何か?
- 3. 被害(蓄積・反応)
- 4. 対処

【1. はじめに】

＜講演の目的＞

本日の講演の目的はマイクロアグレッションとは何かを理解することです。近年、日本でも「マイクロアグレッション」とカタカナでタイピングをして、パソコンなどで検索を

1. はじめに: 講演の目的

- 「マイクロアグレッション」とは何かを理解する
- どうすればよいのか考える
- 日本社会においてマイクロアグレッションの問題提起が持つ意味を考える

すると、日本語での記事がたくさん上がってくるようになりました。にわかに注目されているようですが、マイクロアグレッションとは何かについて、今日はネットで得られる知識より、もう少しプラスアルファした知識を得ることができればよいなと思います。そして、マイクロアグレッションが起こったときにどうすればいいのか考えることと、日本社会においてマイクロアグレッションの問題提起がどのような意味を持っているのかを皆様

と一緒に考えていければと思います。

本論に入る前に少しイメージしやすいように、私がこれまでいろいろな文脈やタイミングで言われたことや経験したことで、マイクロアグレッションに該当するものを挙げてみます。

ちなみに、このような差別の問題や経験などを語るときは、年代や年齢、何時代に生きていたかは重要な情報になるので言っておきます。私は1977年に日本で生まれて日本で育っている在日朝鮮人の三世です。

大学に入って秋学期ぐらいのときから、「きむ・うちゃ」という名前を使っています。それまでは日本名を使っていました。この名前を使い始めて、「はじめまして、きむ・うちゃと申します」と言うと、まず返ってくるのが、「うわあ、日本語うまいですね。いつ日本に来たんですか？」という言葉です。学生だったときは、「へえ、そうなんですか。きむさん、留学生ですか？」とよく聞かれました。日本名で暮らしていたときは言われたことがなかったので、「いや、それはうまいんだろうけどさ」とびっくりした記憶があります。そのうち慣れましたけれども。あとは大学院生のときだと思いますが、「あなたがはっきりものを言うのは韓国の人だからですか？」と言われたことがあります。どういう文脈で出てきたのかわからないのですが、心に引っかかって覚えています。新聞記者の人と話していて言われました。そのほかには、アジアンテイストの服が好きだったときにトラがバーンとプリントされた服を着ていたところ、「それは韓国で買ったんですか？」と言われました。東アジアの国でアジアンテイストの服をファッションとして楽しんでいるのは日本だけではないかなと思うのですが、どうなのでしょうね。「毎日キムチ食べてるの？」と言われたこともあります。

小学校から高校までの間は日本名で暮らしていたので、仲よくなった友達にだけ、自分が日本人ではないとか日本国籍ではないという言い方で伝えていました。そうすると、「ああ、そうだったんだ。気づかなかった」、「えっ、日本人と同じ。変わらないよ。同じだよ。大丈夫だよ」とよく言われました。または「ああ、そうなんだ。韓国語しゃべれるの？」と言われたこともあります。これらは「ふうん、それで？」という何でもないセリフだと思います。いまはとりあえず、マイクロアグレッションとはそのようなことであると、少し頭に置いておいてください。

<今日の問い>

私が言われたことの中からいくつか皆様に問題を出します。「日本語うまいですね」は問題のある言葉でしょうか。上手だと褒めてくれています。では「いつ日本に来たの？」はどうでしょうか。私のことを知りたい、関心を持ってくれている、うれしい質問でもあります。「日本人と変わらないよ。大丈夫だよ」はどうでしょうか。慰めてくれている、安心させようとしてくれています。何ということはない「褒めている」、「私のことを知りたい」、「慰めてくれている」、あるいは単に「会話を長続きさせたい」ということで

発しているこれらの質問です。これらに何か問題があるとしたら何でしょうか。ここにある、ある種の**思い込み**や、その人がそう言うてしまう**発言の前提**が問題になりますが、「これらの質問に問題があるとしたら、一体何が問題なのか」を考えることによってマイクロアグレッションがどのような問題かということに近づいていければと思います。

<なぜマイクロアグレッションか？>

まず、なぜマイクロアグレッションなのかをお話しします。アメリカでの話ですが、一つ目として差別の形態の変化、二つ目として害への注目を挙げました。この本が書かれた

1. はじめに:なぜマイクロアグレッションか？

1. 差別の形態の「変化」
 - 古典的差別と現代的差別
 - 差別主義者と平等主義者
2. 「害」への注目
 - メンタルヘルス、パフォーマンスへの悪影響
3. 人種・民族差別への問題意識の高まり
 - ヘイトスピーチ、SDGs、差別論の新展開(?), 「意識」や「慣習」の現れ

のは 2010 年で、著者のデラルド・ウィン・スー氏は 2007 年ぐらいに論文を書いているので、それよりもう少し前から関心を持って調査や研究などをされていたはずです。

(1) 差別の形態の「変化」

この 2000 年代にマイクロアグレッションがにわかに注目された理由には、一つは差別の形態の変化があります。この変化とは「差別の表れ方の変化」と「差別をする人の変化」に分けることができます。差別の表れ方の変化については、昔のように黒人をリンチして殺すとか、最近では Black Lives Matter の運動が問題化したように、警察の黒人への執拗な取り調べや不必要なまでの暴力などがありますが、表向きには 1960 年代に公民権運動を経て、アメリカ社会では制度的な差別、人種差別は否定されました。リンチをしたり十字架を燃やしたり、そのようなことをしては駄目だ、間違っていると社会的に共有されました。しかしながら日常生活のあちこちに、人々がごく日常的な実践として行う人種差別は残っていました。そのようなごく日常的な実践として残っている人種差別は、殴ったり殺したり、出て行けと叫んだり「何かをする」あからさまなものではなく、遠まわしに表されたり、助けない、仲間に入れないなどのように、「何かをしない」という表れ方をするなど、様々な別の形をとって差別が表れるようになったという変化です。

(2) 「害」への注目

これまでの**差別主義者**は、明確に自分は何々人を差別するということを声高らかに自分の主義、主張として表明していました。しかしながら、それは表向きにはよくないという価値観が共有されていったこともあり、先ほど述べたように形を変えたり、あるいは弱まっています（あからさまな差別主義者がいなくなったわけではありません）。その後、実際に差別的なことを行っているのは、「いや、自分は差別しないよ。この社会は誰にでも平等であるべきだ」と自分は**平等主義者**であると信じている人たちであったことが、80年代以降の研究で明らかになっています。このような現代的な差別の研究の中で改めて注目されたのがマイクロアグレッションです。もちろん差別論のさまざまな進展がありますが、改めて注目される際に、「害」に注目したところは非常に重要です。

害とは、「マイクロアグレッションによって、それを受ける人たちはどのように壊れてしまうのか」ということです。メンタルヘルスに悪影響を及ぼす、職場や学校などで力を発揮できない、身体中にいろいろな疾患を抱えやすくなるなど、そのような「害」の原因としてマイクロアグレッションがあるのではないかという研究が進んでいきました。

(3) 人種・民族差別への問題意識の高まり

そして三つ目が、日本でもマイクロアグレッションが注目されている背景です。ここ 15年くらいの間で人種差別、民族差別への問題意識が日本社会の中で高まっていると言える状況があります。一つにはヘイトスピーチが 2000 年代の初めぐらいに非常に盛んに行われていました。街中で「朝鮮人殺せ」、「出て行け」、「ゴキブリ」などと、とても楽しそうに叫ぶ人たちが現れたことは、皆様の記憶にも新しいかと思います。学生さんにとっては 10 歳ぐらいのときの話ですので、よほどのことがない限り記憶にないかもしれませんが、そのようなことがこの日本社会で毎日 3 件ずつぐらい起こっていました。

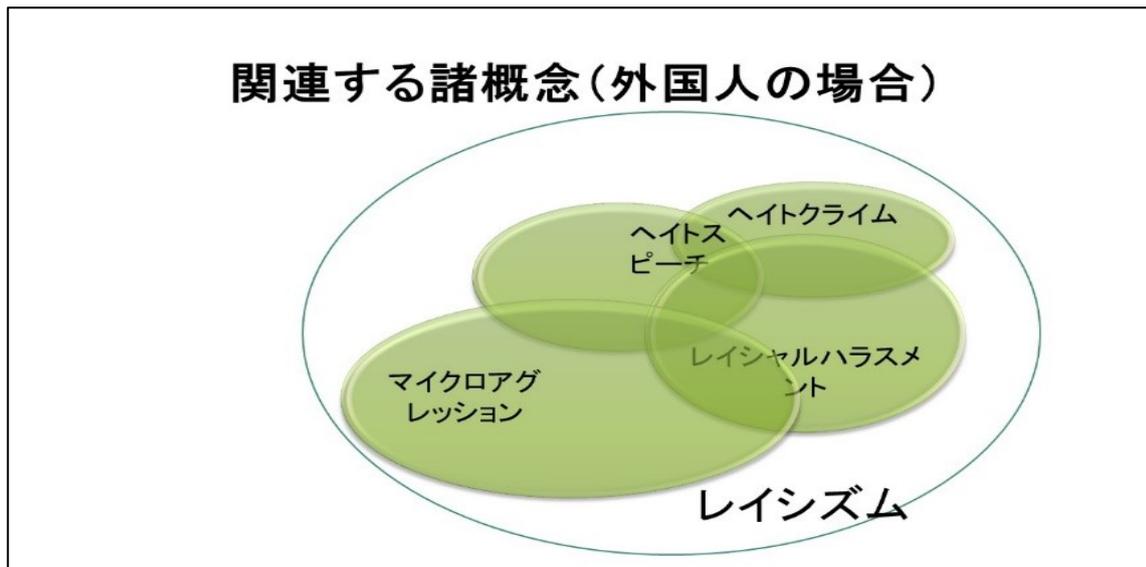
ここ最近になると Black Lives Matter の運動によって、日本社会の中でもいくつかデモンストレーションなどが行われるなど、人種差別に対する問題提起が行われています。SDGs への社会的な関心が高まっているようですし、差別とは何だろう、どのようなことを差別というのか、という研究が私のまわりでは盛んに行われています。

2010 年の京都では「在日特権を許さない市民の会」が「朝鮮人は出ていけ」などと叫びながら街を練り歩くということがありました。京都河原町の高島屋というデパートメントストアがある大通りの繁華街を 100 人ぐらいが朝鮮人に対する罵詈雑言を吐きながら、街を練り歩いたというのが 2010 年の状況です。その 1 年前には京都にある朝鮮学校、小学校と幼稚園が併設されている場所で、「おまえらスパイの子や」、「キムチ臭いんじゃ」などと叫ぶ大人たちが出現する事件が起きました。

上のジェノサイドを呼びかける言葉であるとするれば、マイクロアグレッションは一番下の、冗談、噂、ステレオタイプすること、敵意を表明すること、配慮を欠いたコメント、排除する言語となります。私はこのあたりの話がとても重要だと思いました。

<マイクロアグレッションの概念的位置づけ>

ここ最近、関連するいろいろな言葉がありますが、マイクロアグレッションはどの位置にあるのかを確認しておきます。マイクロアグレッションは、とても小さな目に見えない、



何が起きているのかよくわからない、それとない言動で、ある人たちを見下したり貶めたりします。大前提としてバックにあるのはカタカナで言うとレイシズム、漢字で言うと人種主義、人種差別、民族差別です。この大きな枠の中でいろいろな言動、差別的な言動があり、それぞれヘイトクライム、ヘイトスピーチ、最近だとレイシャルハラスメント、マイクロアグレッションと呼ばれます。図の円形の重なりは、同じ言動がレイシャルハラスメントとして問題提起されるかもしれないし、マイクロアグレッションだと言われるかもしれないということを表しています。ある言葉や台詞はヘイトスピーチかもしれないし、マイクロアグレッションであるかもしれないというように、少しずつ重なっているのです。いまから出す事例の中にも、「いや、それはヘイトスピーチだろう」、「それはハラスメントではないか」と思われる言動があるかと思いますが、少しずつ重なっていると理解していただければと思います。

マイクロアグレッションについて知るときに、重要になる三つの関連概念について説明します。ステレオタイプと偏見と差別です。

ステレオタイプは、社会全体にある特定の集団に対する共有されたイメージです。例えば女性という集団を考えてみると、「女は〇〇だ」、「男は△△だ」、「女性はリーダー

シップに欠ける」、「女は世話に向いている」などがステレオタイプに当たります。

関連概念の整理

- **ステレオタイプ**: 社会全体にある特定集団に対するイメージ
「女性はリーダーシップに欠ける」「女は世話に向いている」
- **偏見**: 社会的に共有されているイメージをもとにしたネガティブな見方・考え方
「男は仕事、女は家庭」(※「家庭」は下にある)、「女性は内助の功に徹すべき」
⇒感情(評価や不満)につながる
「女の上司のもとで働きたくない」、「こちらが社長です」と紹介された人が女性だった時に驚く
- **差別**: 不利益な取り扱い(見下し/聖化、排除/過剰包摂、同化強要/他者化)
「だから女性は登用しない」

偏見は、社会的に共有されているイメージを基にしたネガティブな見方や考え方です。ステレオタイプと重なる部分もありますが、ネガティブな、あるいは正しくないことを主に指すと思ってください。例えば「男は仕事、女は家庭」。これは一見、どちらにも役割があるのでニュートラルにも思えますが、なぜか仕事が優先されて、家庭は二の次とされています。「女性を下に置く」という価値観の前提の基で、「女性は内助の功に徹すべきだ」などが偏見です。偏見は感情とつながると評価や不満として表れたりもします。「女の上司は嫌だ」、「『こちらの方が社長です』と紹介された人が女性だったときに悪い意味で驚く」などです。

差別については、見下すこと、やたらと持ち上げること、排除すること、過剰に繰り入れること、同化を強要すること、おまえはよそ者だ、我々の仲間ではないと他者化することなど、いろいろありますが、とりあえずは不利益な取り扱いとしておきます。

ステレオタイプと偏見を基にして、「女はリーダーシップに欠ける」、「女性は家庭に
いるべきだ」、「女性の上司の下で働きたくない」などのように差別として表れると、
「だから女性は雇わない、登用しない」というのが、ステレオタイプ、偏見、差別の関係
の仕方になります。マイクロアグレッションではステレオタイプと偏見は非常に重要なキ
ーワードですので、頭に留めておいてください。

【2. マイクロアグレッションとは何か？】

<マイクロアグレッションの定義>

それではマイクロアグレッションとは何かという話に入っていきます。マイクロは「小さい」、アグレッションは「攻撃」です。この「マイクロ」は**可視的ではない**という意味

2. マイクロアグレッションとは？

Micro + aggression

微細な + 攻撃

- 可視的ではない
- 無意識／無自覚(たいていの場合)

のマイクロです。決してつまらないとか取るに足りないなどではなく、ミニチュアで見えにくい、目を凝らすか顕微鏡でもないで見えないという意味です。

私たちの身近にあるもので考えると電子レンジみたいなものです。電子レンジはマイクロな波、電磁波が出ていて、電子レンジの中に入れるとものが温まります。しかしその温めで実際に何が行われているのかは見えにくいです。分子と分子が摩擦を起こしているが、その摩擦は私たちの目にはなかなか見えない。しかし何かが起こっている。そのようにマイクロを捉えてください。

もう一つのマイクロの意味ですが、それをする人はだいたい**無意識か無自覚**です。意識的なものもありますが今日は省略します。

マイクロアグレッションの定義ですが、デラルド・ウィン・スー氏は「ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである」とこの本の中で定義しています。いろいろなタイプのマイクロアグレッションを分類し、女性や人種的マイノリティ、そして性的マイノリティに対して、どんなマイクロアグレッションが具体的に行われているのか、その基にあるのは何なのかということ进行分析しています。この定義をもう少し簡単に言うと、「マイクロアグレッションとは、特定の個人に対して、その人が属する集団を理由に、その集団を貶めるようなメッセージを持っているちょっとした日々のやりとり」です。

マイクロアグレッションの定義

マイクロアグレッションとは、ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである。(スー 2020:34)



ポイントは、「意図の有無にかかわらず」ということです。たいていの場合、意図がありません。やる人はたいてい、マイノリティの人と何かいろいろとやりとりをするときに、貶めるメッセージや、敵意があることを伝えてしまっていることに気づいていないというところが大きなポイントとなります。さらには受けている本人が気づかないこともあります。

<アメリカの事例>

具体的な例をいくつか見ていきます。具体例を見る際には、「どの社会で」、「その社会が持っているステレオタイプ」、「そのマイノリティがその社会でどういう位置にあったのか」という社会的な背景や歴史的な背景が非常に重要です。これから紹介する事例は日本ではなくアメリカでの事例ですが、共通するものもあると思います。

一つ目は、アジア系のアメリカ人やラテン系のアメリカ人に「どこから来たの?」とか「どこで生まれたの?」と聞くこと。二つ目は、エレベーターに黒人が乗っていたら、乗ろうとしていた白人は乗らずに見送ること。三つ目は、有色人種の人々をサービス従事者と勘違いする、というものです。これらはそれぞれ文字どおりの意味ではなく、その言動から伝わってくる別のメッセージがあります。

一つ目の、アメリカで既に生まれている二世、三世、四世、五世……といったアジア系の人、ラテン系(南米)の人たちに、「どこから来たの?」と聞く。相手は「うん。ニューヨーク」と答えたのに、「いやいや、どこで生まれたの?」などと執拗に聞くことです。そうではない相手の言葉を期待して言っているという、しつこさがあります。ここで受け手が得るメッセージは、「アメリカ人ではない」と思われているというものです。

二つ目の、エレベーターに黒人が乗っていたら白人は乗らずに見送ること。これが発するメッセージは「黒人であるあなたは危険である」ということです。

三つ目の、有色人種をサービス従業者と勘違いすることは、「有色人種は白人の召使である」、「高い位置にいるわけがない」というメッセージを伝えます。

そのほかジェンダーに関するものに触れます。例えば三人称として「he」を無条件に使うことは、「男性の経験は普遍的、女性の経験は無意味である」というメッセージを伝えてしまいます。本人が意図しようとしまいと関係なく、です。あとは「主張する女はくそ女(Bitch)」。「Bitch」は日本語でどのように訳すべきか困りますが、「くそ女」、「嫌なヤツ、嫌な女」としておきます。「女性は本来受動的であるべき」、「わきまえろ」というメッセージを伝えてしまいます。また、女性の医者が看護師と間違われるのは、「女性はケア役割についているものだ」という前提があるということです。

ほかにも黒人のカーリーヘアを勝手に触るという行為。見知らぬ人に勝手に髪の毛に触られるというのは結構怖い体験ですよね。私が話を聞いたのは女性の方が多かったのですが、断りもなく髪の毛に触られる、まるでぬいぐるみ扱いだと言っていました。このようなこともマイクロアグレッションだと言われています。

この本にインスパイアされていろいろなマイクロアグレッションの研究が行われている中で、非白人の子どもたち、小学生、中学生ぐらいの子どもたちが多く受けているマイクロアグレッションの事例を紹介します。フィリピン系アメリカ人学生の母親の旧姓を教員が聞いたので、学生が「サンデル」と答えると、教員は「サンデル？」とモノ扱いして、教員も聞いている人たちも笑ったという事例です。

もう一つは、アメリカ的ではない名前、特に南アジア系の名前に、西洋的な名前をつけることがマイクロアグレッションの事例として挙げられていました。これはアメリカの奴隷制の歴史が関係しています。アフリカ大陸から連れてきた黒人奴隷に、奴隷主が呼びやすい名前を付け直す、「re-naming」という歴史を持った社会で、呼びにくいから、自分が楽をするためという理由で西洋的な名前を付け直すということは、単にニックネームを付けてあげるということ以上の差別的な意味を持ってしまいます。

<日本の事例>

日本での事例をいくつか紹介します。これは大阪の中学・高校で、「出自が外国にある生徒さんたちの教育問題に向き合う」という教員のグループが「大阪版マイクロアグレッション」としてまとめたものです。例えば日本の学校で、カルロスくんというブラジル系の子が「なあなあ、カルロス。ブラジル人やしサッカーうまいんやろ」と友達から褒められているところです。「ブラジルから来たからといって、みんなサッカーが上手なわけじゃない」、「ブラジル人はサッカーができる決めつけられていつも嫌になる」というカルロスくんの心の内が読み取れます。友人は褒めています、カルロスくんは「ブラジル

人だからってサッカーできると決めつけられて嫌になっている」ので、多分サッカーをしない人なのでしょう。この事例はステレオタイプに人を当てはめています。カルロスくん



がもしサッカーがうまくても、「うわあ、カルロス、サッカーめっちゃうまいやん。やっぱりブラジル人やな」となり、うまいのはカルロスくんの努力ではなくて、カルロスくんの生まれに結びつけられます。「下手でも何々人だから。うまくても何々人だから」という褒め言葉には、実はその裏があります。

次の事例はとてもよく聞く話ですが、イ・ミンジュンさんという韓国朝鮮系の人がバイト先の店長から、「その名前じゃなくて日本の名前はないの」と、日本の名前を名乗ってほしいと求められる事例です。特に接客の職業ではわりと多いと聞いています。客の反応を店長は気にしているが、イさんだと嫌がる客の存在というのを、この店長は肯定してしまっています。それは「イクン自身」そして「イクンが属する集団の存在」がこの社会では好ましくない、望ましくないのだと伝えることになってしまいます。

このほかにも卒業証書の名前で、「『金』というのは悪い名前で恥ずかしいから『金山にしてくれへんか』と言われた」事例や、「コンビニのバイトに申し込んだら、面接で名前を見て、『レジのお金が合わなかったら一番に疑われるかもしれないよ』と言われた」事例など、名前に関してはいろいろな話があります。

そのほかには KEY という在日コリアンの青年団体が、とある大学教授とともにヘイトスピーチに関する調査をして、ヘイトスピーチとは言い難い、「差別未満」の経験として分類したものがあります。

「一番傷ついたのは無理解。『なんで日本にいるのか、なんで韓国語しゃべれないのか』と聞かれ、説明しても聞いていない。理解する気もない。植民地支配について批判したら

「差別未満」

- 30代男性「一番傷ついたのは無理解。「なんで日本にいるの?」「なんで韓国語しゃべれないの?」と聞かれていくら説明してもそもそも聞いていない。理解する気がない。もし日本の植民地支配について批判すれば「じゃあ韓国帰れ」などと言われる」(KEY 2014:28-29)
- 20代女性「信頼していた人に在日であることを話しても、「あなたはあなた。そういうことで関係が変わったりしない」と言われ、理解されていないと感じた。」(KEY 2014:29)
- 20代女性「中学生のとき、チマチヨゴリで通学時に、日本人(と思われる)女性に嫌悪の目で見られた。」(KEY 2014:31)
- 30代男性「ヘイトスピーチがいかにも問題かを強く主張したときに、知人の日本人に、「考えすぎだ」「そこまでの問題ではない」と言われただけでなく、「朝鮮人はすぐにそういうふうが悪い方へ悪い方へと考えるから」と言われた。」(KEY 2014:31)

『じゃあ韓国帰れ』と言われた」という事例や、「信頼していた人に在日であることをせつかく話したのに、『そういうことで関係は何も変わらないよ』と言われた。慰めになったりもする言葉だが、何か少し違うなと感じた」といった事例があります。

<事例から見るポイント>

事例から見るポイントは、マイクロアグレッションは「人種やジェンダーに関連している」、つまり何らかの属性に関連しているということです。個人の資質や性格などではなく、個人の資質や性格などについて言うときでも、人種やジェンダーに関連づけて何かが行われているということです。「それとないこと」なので何だったのだろうなと考える間もなくその場面が過ぎ去ってしまうような出来事です。それらの出来事は非常にそれとない日常の一コマであり、「言語」「非言語」あるいは「環境」で表されます。「環境」とは、例えば何かのシンボルを作るときに先住民を戯画化したシンボルを使うとか、いまとなればもうセクハラと認識されていますが、女性のヌード写真が載っているカレンダーや雑誌などを職場の机に置いておくといったことも含まれます。

マイクロアグレッションを行うのは、親しい人から見知らぬ人にまで至ります。エレベ

ーターで乗るか乗らないか、どないやねんという感じで結局ドアが閉まった、その見知らぬ人であることもあるし、親しい友達であることもあります。とりわけジェンダーやセク

事例から見るポイント

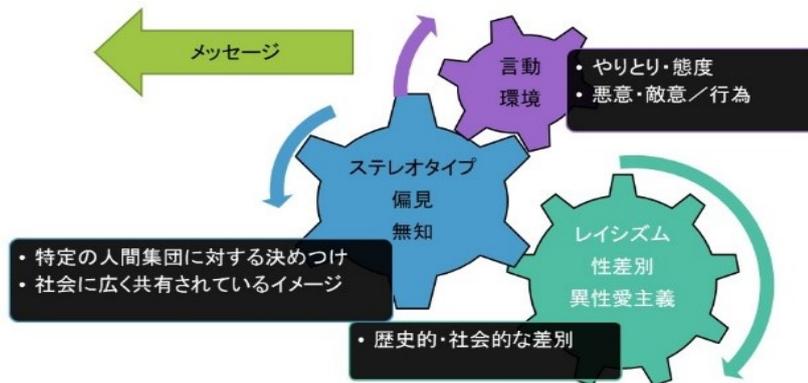
- 人種やジェンダーに関連
 - 微妙／それとない
 - 言語・非言語・環境
 - 親しい人～見知らぬ人
 - 当該社会の歴史的経験
- 前提・思い込み(偏見・ステレオタイプ)**
→隠れたメッセージ

シュアルマイノリティの人については、自分の家族から受けることもあります。その社会がそのマイノリティと結んできた関係や歴史的な経験が、とある言動をアグレッションにすることがわかると思います。マイクロアグレッションがアグレッションになるのは「前提」や「思い込み」、多くは「偏見」と「ステレオタイプ」によって、です。これが「劣っている」、「この社会のメンバーではない」など、いろいろな隠れたメッセージとして、相手やまわりの人に伝わってしまいます。

<マイクロアグレッションの作動>

マイクロアグレッションは、それを発する本人の意図とは別に、その言動や環境がマイクロなアグレッションに繋がってしまうという構造の問題です。これが作動する背景にはステレオタイプや偏見や無知があり、それを支えたり再生産したりしているのは、人種差別主義、性差別、そして異性愛主義など、歴史的、社会的な差別です。その言葉だけ、あるいは行動だけが独立してあるのではなく、大きな差別の構造の中にあると捉えたらよいと思います。

マイクロアグレッションの作動



【3. マイクロアグレッションの被害（蓄積・反応）】

<被害>

マイクロアグレッションの被害はさまざまに指摘されています。一つ目にメンタルヘルスへの悪影響、二つ目に敵対的かつ侮蔑的な職場や学内環境をそのまま放置してしまうこ

被害

- ①メンタルヘルスへの悪影響
 - ②敵対的かつ侮蔑的な職場・学内環境
 - ③ステレオタイプの恐怖を永続化
 - ④身体への悪影響
 - ⑤社会的集団のアイデンティティを貶めるサインが社会に浸透
 - ⑥仕事の生産性と問題解決能力を低下させる
- + 二次被害:ステレオタイプの強化

と、三つ目にステレオタイプの恐怖を永続化してしまうこと、四つ目に身体への悪影響です。実際に血圧が上がったり心拍数が増加して息苦しくなる、それらが原因でいろいろな疾患をもたらしてしまうという研究結果もあります。そして五つ目が、その社会的集団、その集団のアイデンティティを貶めるサインがそのまま社会に浸透し続けてしまうこと、そして六つ目に、仕事の生産性、パフォーマンスの低下をもたらしてしまうことです。さ

らに、これに反論したり訴えたりすると二次被害が待っています。ステレオタイプを強化してしまうというものです。

この被害を理解するために、マイクロアグレッションの特徴に注目したいと思います。見えにくく「非可視的」で「非常に小さな言動」であり、たいがいは無意識あるいは無自覚、そしてよかれと思ってやっている善意であることもあります。よってこれをやる人（マジョリティ）には何が問題なのかを理解するのが難しいのです。しかしながら、マイノリティにとっては一過性ではなく、継続的です。後に「蓄積」の話をしませんが、マジョリティにとっては単に「日本語うまいですね」と言っただけ、単に「エレベーターなどで女性の腰に手を当ててエスコートをしてあげただけ」であり、一瞬で一回きりのことです。しかしながらそれを受けている人たちは、同じ形あるいは違う形で、ずっと同様の言動を受け続けています。しかもメディアや同僚、隣人、友人、教師、教育プログラム、カリキュラムなど、あらゆるものからそれを受けたり、類似のメッセージを聞いたりします。あまりに日常的で至るところに見られるので、気づかれないことが多いです。しかしながら受ける方は生まれてから死ぬまでずっと受け続けます。

<講師の場合——経験の時間軸>

私の個人的な話をするのは気が引けますが、継続性と蓄積が分かるように、少し自分の話をさせていただきます。（図は省略）

冒頭でお話ししたように、「きむうちゃ」以前と以後での経験に分けてみます。名前を「きむうちゃ」にする前まで、小学校から高校生くらいまでは「日本人と変わらない。同じだよ」とよく言われました。名前を変えてから、「日本語うまいですね」、「いつ来たんですか？」はずっと言われ続けました。授業に行けば、「わが国の社会福祉政策は…」、わが国ってどこやねんと感じたり、本当のところの理由はよくわかりませんがバイトを落とされたり、一人で暮らしているとセールスの人が来て「ご主人様はいらっしゃいますか」と言われ、私が（この家の）主人ですけれども……、と心の中でつぶやいたり。民族とジェンダーのマイクロアグレッションが入り交じっていますが、ずっと続きました。しかも、ふとした瞬間に来たり来なかったりという経験です。こうした言動に加えて、教育やメディアなどが発する情報も重要です。私の場合ですが、韓国や朝鮮、在日に対するネガティブな内容を、私は内面化していたと思います。どのような内容か全然覚えていないし、特に誰から言われたというわけではないのですが、私は韓国や朝鮮は日本より劣っていると思い込んでいましたし、言ったらいけないことなのだと小学生、中学生、高校生まで思っていました。誰もそのようなことは「言ったらあかんで」と教えてくれませんでした。私がどこかでそれを学んだのです。そのように内面化してしまうような情報を日々浴びさせられるこの社会の中で、数々のマイクロアグレッションに遭遇するのです。

制度的な差別だけではなく、非制度的な差別を心配しなくてはならないこともあります。例えば下宿を借りるときに、「国籍が日本ではないけれど、大家さんきちんと貸してくれますかね」と、いちいち心配していました。一つ一つはその場限りでも、その人がその社

会の中で経験してきたことや内面化してきたことなどをベースに、ずっと代わる代わる出会い、遭遇し続けるのがマイクロアグレッションです。「蓄積」と言っているのはこういうことです。

例えば、フランスへ行くためにビザが必要なのかを調べただけなのですが、「フランスに行ってもいいけど、悪いことしても日本人ですと卑怯なうそはつかないでくださいね」というネットの書き込みを目にしました。これが日常です。オンラインでもっとアクティブに活動している人は本当に大変だと思います。

私は立命館大学で朝鮮語を教えています。日本の教育機関で外国語を習う人は、全員日本人が前提になっています。教科書の登場人物で、言語を習っている役割の人はみんな日本人です。初学者が使う基礎の教科書で説明が必要そうな言葉を登場させるのは非常に難しいことはわかっていますが、要はこのような環境だということです。

<反応>

教科書の登場人物も、ネットの書き込みも、私が遭遇した様々な出来事や言動も、それだけ見れば、そんなに問題ではないと思うかもしれません（私も実際、一つ一つにいちい

発し手と受け手の認識ギャップ、反応の違い

- ①マイクロアグレッションが起こったのか判断
点を線に vs 一過性の事故、自分は善人
- ②反応の仕方は双方ともに多様
無反応→自己欺瞞→ストレス vs 自己防衛
- ③反応して否定的結果をもたらす
非難、ステレオタイプを強化 ⇒結局沈黙

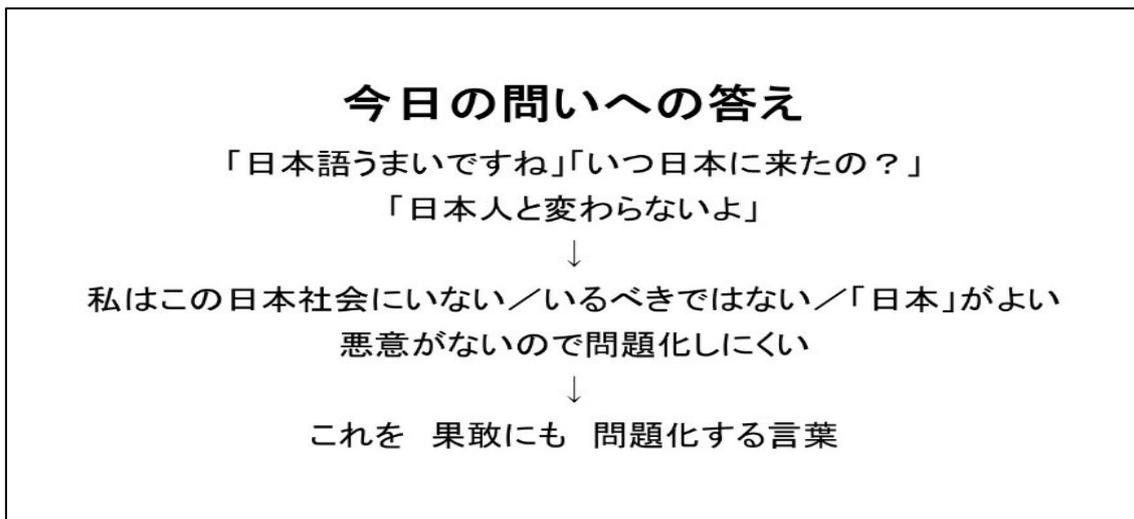
ち傷ついているとか、ショックを受けているわけではありません）。そこにマイクロアグレッションを発する人と受ける人の認識のギャップ、反応の違いがあります。マイクロアグレッションを受け続けている人（マイノリティ）は、点を線にして考えます。でもやった方にとっては、それは一過性の事故で、「自分はよい人なのだからそんなことをするはずがない」、「そういう意図でやったのではない、言ったのではない」と自己防衛に走ります。

マイクロアグレッションを受けた人は基本的には**無反応**です。この無反応にはいろいろな意味とプロセスがあります。一つは、あまりにそれとない登場の仕方をするので、反応

する前に会話が先に進んでしまったり、「あれっ？」と思っても、「いや、この人はそんな意味で言ったのではないし、私が考え過ぎなのだ」と、自分の違和感をなかつたことにしようします。そうすると、「あれっ」と思ったモヤモヤは残り続けて、結局ストレスになります。もしも「さっきのあれは何か差別的な発言ではないのか」のように反応すると、結局非難されるのはマイノリティの側です。「いや、考え過ぎだよ」、「敏感過ぎだよ」、「そんな気にしなくてもよくない？むしろビョーキじゃないの？」と非難されるか、「ほら、やっぱり文句言う」、「いつも怒っているマイノリティ」というステレオタイプを強化してしまうので、たいがいの方は沈黙してやり過ごします。無反応でいることは、ストレスは溜まるけれども、一番楽ではあります。なぜなら、親しい人とのやりとりの中で雰囲気壊したくないと多くの方が思いますし、見知らぬ人でしたら、いちいちそのパワーを使って何かを言うのは、はっきり言ってしんどいです。そんなしんどさはとりあえず置いておいて日々を生きていく、流して生きていくのがマイノリティの日常なのかなと思います。

<今日の問いへの答え>

今日の問いへの答えですが、「日本語うまいですね」、「いつ日本に来たんですか?」、「日本人と変わらないよ」、これは「私のような存在はそもそもこの日本社会にいないん



だ」という前提から発される言葉です。そしてこれは、どこかで「いるべきではない」にスライドしていきます。日本社会では外国人はみんな外から来た人という前提があるから、「日本語うまいですね」になりますし、日本人ではないことが逸脱や劣った存在と見なされるから、「日本人と変わらないよ。大丈夫だよ」という発言が慰めになるのです。ここには、日本人でないといけない、日本がよい、同じがよいという前提が潜んでいます。これには悪意がないので問題化しにくいです。それを果敢にも問題化させてくれる用語がマイクロアグレッションなのではないでしょうか。

デラルド・ウィン・スー氏はより害に注目して、マイノリティの精神衛生について考え

るという方向性ですが、それよりも日本の中でセクシュアルハラスメントという言葉がもたらした衝撃や効果を考えてみると想像しやすいと思います。かつて、会社に入社したら女性たちは、よくわからないままミニスカートとベストの制服を着せられて、まわりの男性社員にお尻を触られてもそれは普通で、昇進などは考えず、早く子どもを産んで、社内で結婚して寿退社だ、というのが普通であったときに本当にありました。それが大きく変わったのが、「性的嫌がらせ」や「セクシュアルハラスメント」という言葉であったと思います。「マイクロアグレッション」という言葉は、問題があるのに見過ごされてきたことに人々あるいは自分自身が気づき、対話を始めるきっかけになるかもしれません。

マイクロアグレッションという言葉はもしかすると、それまでの差別発言や無理解、無知という既存の問題提起の仕方の単なる言い換えかもしれません。しかし別の言い方をしてみることで、何か問題提起をするパワーを得られるのであれば、マイクロアグレッションという言葉にも意味はあるでしょう。いろいろな人が、自分が言ってしまったあの言葉とか、自分が言われたこれってマイクロアグレッションなのかなと、話を始めるよいきっかけになると思われます。マイクロなことはもちろん重要ではありますが、一方で制度的な差別も日本社会の中には根強く残っていますし、ヘイトスピーチも継続しています。差別のさまざまなありようを全部視野に入れつつ、マイクロアグレッションという言葉が、差別を語るきっかけになればよいと思います。

【4. マイクロアグレッションへの対処】

最後に、マイクロアグレッションだと感じたときにどうすればよいのかが問題だと思います。私たちはみんな「目の前にいる誰かが何者か」というのはわからない状況で生きて

**おわりに：
目の前にいる誰かが何者か、わからない**

「何も言えなくなってしまう」...のか？

●前提：

私たちは、目の前にいる誰かが何者であるか知らない

※特に日本では、見た目にはわからないマイノリティが多い

当事者はどこにでもいる

ステレオタイプの効用

います。マイクロアグレッションが問題と言ったら、もう何も言えなくなってしまうと思

うかもしれません。日本では特に見た目にはわからないマイノリティが多くいます。私も外国人とは思われないですし——では外国人なのかと言われても、日本で生まれて育っているのでそれも違うと思うのですが——、在日朝鮮人や部落の人たち、アイヌの人たち、沖縄の人たち、あるいは同性愛者の人たちもそうかもしれません。見た目がどうであれ、目の前にいる誰かが何者であるかは、私たちはわかりません。当事者はどこにでもいます。

さらにステレオタイプには効用もあります。人といろいろな話をしていくときに、自分の知っている最大限の知識がステレオタイプで占められていることもあり、相手への関心の示し方の一つとしてあるので、必ずしも悪いこととも言えません。

ではどうすればいいのか。「普通はそうだよ」という日本人中心主義、自民族中心主義、男性中心主義、異性愛中心主義といった「〇〇中心主義」を疑うことと、マイノリテ

おわりに: どうすれば?

●防止・気づき

〇〇中心・至上主義、「フツー」を疑う

多くの物語を知る

⇒ステレオタイプを解除

イや他者について多くの物語を知ることが、防止の手がかりになります。そうすることによって、それぞれに持っているステレオタイプを解除していけるのではないのでしょうか。

対処するには具体的にどうしたらよいのかですが、私たちは加害者になることも、被害

具体的に、どうすれば?

●対処

即対応、指摘、対話

※加害者になる、被害者になる、第三者として目撃する

- 聞いてみる: 「それはどういう意味ですか?」⇒「私はこのように受け止めました」
- 蒸し返す: 「さっきの／あの時の〇〇だけど...」
- 気づかせる: ミラーリング、笑い

者になり得る属性を持っている人は被害者になることも、第三者として目撃することもあります。一番よいのは**即対応**で、その場で指摘し対話することです。ただ、これは非常に難しいです。そのような場面に遭遇してしまったら、「それはどういう意味ですか」と、にっこり**聞いてみる**。その場で言うのは難しくても、後で話ができる場合には、「さっきのあれですけども」、「あのときのあれですが」と**蒸し返す**。さらに勘がよくてある程度鍛えている人でしたら、相手が言ったことがいかに変なのかを**気づかせる**。少し笑いに持っていき、同じように少しひねって質問をしてみること（ミラーリング）によって、相手がいかにステレオタイプに基づいたことを言ったのかを気づいてもらう、ということがあり得ると思います。これは訓練が必要なのでできるかわかりませんが、よいアイデアがありましたらぜひ教えていただきたいと思います。時間が少し過ぎてしまいましたが、私の話はこれで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○司会：金先生ありがとうございました。ここから質疑応答に移ります。ただいまの金先生のご講演を聞いてご質問がございましたら YouTube Live のチャットからお願いいたします。

ところで、本日の講演の申込者リストを見ていましたところ、本学の西原廉太総長からも申し込みがございました。ここまでの話を視聴しておられましたので、ここで金先生と参加者の皆様にご挨拶とコメントをいただきたいと思います。西原先生はこの 4 月に立教大学総長に就任され、直後に「ヒューマン・ディグニティ宣言」を発表されました。

【立教大学 西原 廉太 総長のコメント】

○西原：金 友子 先生、大変素晴らしいお話をありがとうございました。一言どうしてもお話ししたいと思いましたが、私の所属は文学部のキリスト教学科でして専門がキリスト教神学なのですが、実は私は生まれも育ちも京都で、京都大学の工学部で金属工学を専攻していました。

工学から神学に専門を変えた大きなきっかけは、京都大学 1 年生のときに、主に在日コリアンの子どもたちと遊ぶサークルに参加したことです。私が行ったのは京都駅の南側にある京都の東九条という、在日の韓国朝鮮の方々が多くお住まいだった地域の公園でした。大変恥ずかしながら 18~19 年間、京都に生まれ育って、在日の方々に対する差別があるということ、そして歴史についても無関心であったので、そのときに初めてこの京都の街に差別があり、それを生み出した歴史があることに気づかされました。私はそこである一人の在日の青年ととても親しくなり、毎晩のように東九条のねぎ焼き屋さんで語り合っていました。あるとき、私は彼に言いました。「俺はおまえを差別なんかせえへん。おまえも俺も同じ人間やないか」と。すると彼は突然怒り出して立ち上がって私の胸ぐらをつかんで、「れんた、あほか。何が一緒や。俺とおまえは違うやろ。立っているところが違う

やろ。おまえは日本人で俺は朝鮮人や」と厳しく責められました。そのときに少々殴られたりして痛い思いもしたのですが、その痛みというのは肉体的な痛みというより、私自身の人生にとってとても大きな問いになりました。

私自身が立っているところはどこなのか、**足を踏まれている人の痛みは踏んでいる者にはわからない**。そして、第三者的な立場などはない。私も彼を差別してきた側の人間であるし、足を踏んでいた側であるということに、そのときに初めて気づかされたのです。それ以来、大幅に専門を変えて現在に至っています。金 友子 先生の話の伺い、当時の「おまえも俺も同じ人間やないか」という私の言葉はまさしく、マイクロアグレッションにほかならなかったのだということに改めて気づかされました。また同時に、40 年前のことですが、私にとってはマイクロであっても、彼にとっては決してマイクロではなかった。そのことにいまさらながら気づかされました。

立教大学でも、他者の痛みにセンシティブになれる感性を持つことができる学生たちを育てていきたいと改めて確信いたしました。本日は本当にありがとうございました。

○金：西原先生、コメントありがとうございました。西原先生が言ってしまった「同じ人間やないか」というのと、それに対して「何が一緒や」という経験というのは非常に重要だと思っています。そして**足を踏んでいる人は、踏んでいる足をどかすことができる**という気づきの一歩になるのが、もしかしたらマイクロアグレッションへの気づきであり、差別できてしまう立場に自分がいるということへの気づきというように、ステレオタイプを解除することや足をどかすことにつながると思います。

それではいくつかご質問いただいたので、答えさせていただきます。

【質疑応答】

質問 1：マイクロアグレッションについては、多数派の立場から少数派へというのがやはり不可欠ではないでしょうか。また韓国における不買活動も「アグレッション」なのでしょう。

○金：私もそう思います。もちろん少数派の人が多数派の人に対して不快なことを言ったり、あるいはステレオタイプに乗ったことを言ったりすることはあると思います。しかしそれはステレオタイプの強化やステレオタイプの再生産としての問題です。マイクロアグレッション、あるいは差別の問題を考えるとときに権力関係が非常に重要になってきます。多数派、少数派、社会の中での権力を多く持っているか、少なく持っているか、あるいは全く持っていないかが大事です。

これは例えば私と誰か日本人の間では、日本人と朝鮮人ということが重要になることもあるし、もしかしたら、別の権力関係が働くこともあります。例が不適切でしたら申し訳ないのですが、例えば大学教員と無職の引きこもりの人、社会的に発言する権力や地位を

持っている人といない人といったように。

この権力関係の軸は、民族、ジェンダー、性的指向などいろいろあると思いますが、この権力関係が非常に大事なポイントになります。

そう考えますと、韓国における日本製品の不買運動は、特にアグレッションとしてカウントされないのではないかなと思います（問題ではないと言っているのではなく、マイクロアグレッションとは別の問題だ、という意味です）。

質問2：マイクロアグレッションの考えが広がると、通名で暮らし在日バックグラウンドを明らかにしたくない人に対してマイクロな糾弾にならないか。アイデンティティについてこうすべきという言説を拡大すると、そうしたくない人を結果として抑圧することにはならないか。

○金：これはマイクロアグレッションとは別の話だと思います。「マイクロアグレッションの考えが広がる」とことと、「明かしたくない人に対して糾弾になりそう」というのはつながらない、私にとっては別問題です。

例えば私のように本名を名乗っている在日の存在が、日本名で暮らしている人たちに対して、「なぜあなたは本名を名乗らないのですか」、「在日として発言する人はみんな本名を名乗らないといけない」という無言の圧迫になっていることはあると思います。ただ、これはマイクロアグレッションとは別の話だと思います。

質問3：「奥さん」「ご主人」「女は奥にいる」など、マイクロアグレッシブな言葉遣いや語彙について、そのようなものを避けるためにどうしたらよいのか。

○金：これは難しいです。私も悩みましたが、他人の配偶者のことを呼ぶときには、名前を知っていたら名前呼びます。しかしそれが変なときもあり、名前を知らない配偶者について尋ねるときには困ります。パートナーという言葉を使ったり、法的に結婚していると思われるときは、堅い言い方になりますが「配偶者の方は」、友人である場合には関西風ですが「連れ」や「お連れの方」、「お連れ合いさん」と言ったりします。こういう語彙はいろいろな形で、相手にきちんと通じる、よい言葉が広まってほしいと思います。

○司会：金先生、本当に丁寧いろいろお話しくださいまして、ありがとうございました。質疑応答によって、マイクロアグレッションについてより理解が深まったように思います。さて、ここで人権・ハラスメント対策センター長の荒川章義からご挨拶をさせていただきます。

【人権・ハラスメント対策センター長：荒川 章義 の挨拶】

○荒川：金先生、どうもありがとうございました。非常にわかりやすく、ざっくばらんに

お話をしていただいたので、今回この講演会を視聴していただいた皆様には、はっと気づくことが多かったのではないかと思います。実は我々がマイクロアグレッションという概念を知ったのは数カ月前なのですが、少し勉強させていただいたときに、こういうのをマイクロアグレッションと言えばよいのだと、非常に明瞭に言語化できた気がしました。マジョリティの側に立っていると、なかなか意識できないことですが、でも我々もマイノリティの側に回るといのはいくらでもあります。例えば外国に行くと「日本人というのはこうだね」と決めつけをされてモヤッとすることもたびたびありますが、こういうのをマイクロアグレッションと言えばよいんだと、非常に頭の中で明快になった気がしまして、今日のお話でもそれは非常によくわかりました。

マジョリティの側は無意識のうちに、あまり悪気もなくやってしまうので、なくしていくのはなかなか難しいのかもしれないですが、このように言語化したり、意識化したりすることによって、少しでも減らしていければよいのかなと思いますし、そのきっかけに今日の金先生の講演会がなれば、我々としては非常にうれしく思います。

○司会：最後にもう一度、金先生に大きな拍手をお送りしたいと思います。本当にありがとうございました。

○金：ありがとうございました。

○司会：金先生、そしてご参加いただきました皆様、本日はどうもありがとうございました。

(終了/1時間40分)

以上